

## 訪問看護師の キャリアアップ⑥

～キャリアアップ実例紹介～

全5回にわたり、自らの活動の場を積極的に見つけて活躍している看護師を紹介。資格や教育のみにとらわれない、実際的なキャリアアップの姿を紹介してきた実例紹介を今回で締めくくる。11人それぞれの生き方を、今後の飛躍の参考にしてもらえれば幸いだ。

本シリーズは、“在宅医療の可能性を追究していく”ことをテーマに、本誌編集委員が交代で監修するページです。今月は、沼田美幸氏担当の第9回です。

### FILE 10 居宅介護支援事業所所長

## 「看護師と社会福祉士という2つの資格を持っていることが、私の大きな財産になっています」

NPO法人ゆうらいふ理事長・所長 **山田登喜子氏**



NPO法人「ゆうらいふ」理事長兼所長である山田登喜子氏は、独立した社会福祉士事務所・居宅介護支援事業所を開設し、総合的なケアマネジメントを展開している。同氏は看護師としてスタートしたが、その後、結婚・出産によるブランクを経て、自治体で地方公務員として福祉保健の職に就く。また、その傍ら社会福祉士の資格を取得するなどユニークな経歴の持ち主である。同氏のキャリアを通して、看護師のダブルライセンスの意義やその生かし方について考えてみたい。

### 「看護師」への違和感と 「社会福祉士」との出会い

山田氏は看護学校卒業後、宮崎県立病院に就職するが、働き始めてすぐに「自分に本当に向いているのは看護師の仕事ではないかもしれない」と思った。一方、同じころソーシャルワーカー、医療ケースワーカーという職種があることを知る。

「自分は本当はこういう相談の仕事がやりたかったのではないかと思いました。それで、働きながら社会福祉の資格を取得するために、京都にある佛教大学の社会福祉学科通信教育課程に入学したのです」

その後上京し、国家公務員共済組合虎の門病院に勤務。仕事の合間を縫って京都に行きスクーリングを受けていたが、思いのほか仕事と学業の両立は厳しく、課題のレポート提出もままならなかったという。そのため、より学校に近い場所で仕事を

しようとして京都大学医学部附属病院へと職場を変えた同氏だが、そこで1つの出会いがあった。地元で病院事務関連の仕事をしていた現在のご主人と知り合ったのである。やがて結婚、それを機に退職し、家庭に入った。大学も途中で断念した。

2年ほど主婦業と子育てに専念した同氏だが、何か仕事をしたいという気持は常にあったと当時を振り返る。そんなとき、居住する守山市に隣接している野洲町役場で職員を募集していることを知り応募、正職員として採用されることになる。役場では福祉保健課に配属され、おもに保健予防など地域保健にかかわる業務全般を担当する。

「看護師の仕事とは全く違うわけですが、ある意味で自分が志向していたソーシャルワーカーの仕事に近い部分もあったと思います」

だが数年たち、子育てが一段落し

て仕事にも慣れてくると、今度は一度はあきらめた社会福祉士への夢が再び同氏のなかで大きくなっていく。

「主婦をやっている、仕事をしていても、どうしても満たされない部分がありました。それで、下の子が小学校3年生くらいになったときに「私、そろそろ勉強したいんやけど」と言って、家族にOKをもらい佛教大学へ再入学したのです」

とはいえ、主婦をしながら仕事と学業の両立というのでは、さぞかし苦勞も多かったのではないだろうか。そのことを聞くと、同氏からは意外な答が返ってきた。

「勉強したり、スクーリングに通ったりすることが、楽しくて仕方なかったですね。しんどいと思ったことは一度もなかったかな。逆にストレス解消になっていたと思います。それに、自分が現場でやっていることを系統的に勉強できたことも大きな

プラスになりました」

## デンマーク研修での経験が その後の人生を決定付ける

1991年、山田氏は晴れて佛教大学を卒業し、社会福祉士の資格を取得する。

「資格取得のために1か月間の実習もあったのですが、当時の上司が理解のある人で、なんとか許可をいただいて参加することができました。それと、タイミング良く、私の在学中に社会福祉士が国家資格になったんですね。いろいろな意味で恵まれていたと思います」

社会福祉士の資格取得を機に、同氏は自ら希望し福祉保健課から新設された高年福祉課へ異動となる。

「新しい制度ができたり、制度改革が行われる真っただなかで、『世のなかはこういうふうに変わっていくんやな』と思っていました。私は保健師ではないので、保健福祉の仕事だけに専念するわけではなく、補助金の申請などの事務的な業務もやっていました。高齢者福祉にかかわる仕事をしながら、並行して国の補助金の流れや地方自治体の予算の仕組みなどについて学ぶことができたのは非常に大きかったし、今の仕事に役立っていると思います。そういう意味では、看護師と社会福祉士という2つの資格を持っていることが、私の大きな財産になっていますね」

さらに、1991年には同氏の人生にとって大きなターニングポイントとなる出来事がもう1つあった。「デンマークにおける高齢者福祉医療制度の現状」の視察研修への参加である。

「岡本祐三先生（神戸看護大学教授）のコーディネイトで、福祉先進国であるデンマークに福祉制度を学びに行くというものでした。私は、当時、野洲病院で事務長をしていた夫とともに参加しました」

デンマークでの研修は、同氏らに大

### 山田氏のターニングポイント

- 1971年 看護学校卒業、宮崎県立病院に勤務。佛教大学に入学
- 1973年 国家公務員共済組合虎の門病院に勤務
- 1975年 結婚後、京都大学医学部附属病院勤務を退職
- 1978年 滋賀県野洲町役場職員となる。福祉保健課に14年、高年福祉課に3年勤務
- 1986年 社会福祉士資格取得のため佛教大学に入学（2回目）
- 1991年 デンマークへの視察研修に参加。佛教大学社会福祉学科卒業、社会福祉士資格取得
- 1995年 野洲町役場を退職、社会福祉士事務所「ゆうらいふ」を開設
- 1999年 特定非営利法人の認可を受ける

きなカルチャーショックを与えたという。

「当時の私は、自己選択や自己決定、自己責任とは何なのかもわかっていませんでした。あれだけ勉強したつもりだったのに、自分が何も知らないということにショックを受けましたね。短い期間でしたけれど、福祉というのは生活文化なんだということを感じることができたと思います。そのときのことが原風景として、今でも目に浮かびます。『あの国で行われていたことは、いったい何だったのだろう』、『なぜ、あんなふうに見えるのだろう』…。何かあるたびに、そういったことを考えてしまいます」

デンマークでの研修は、夫の亘宏氏の生き方も大きく変えることになる。亘宏氏は、医療・福祉の理想を掲げてのちに政界に進出し、守山市議会議員を経て、現在は守山市長を務めている。

「立場は異なりますが、夫も私も原点にあるのはデンマークでの経験なんです。デンマークでの研修が私たち夫婦の人生を変え、その後進む道を決定付けたと言えるほど、私たちには大きな出来事だったんですね」

### NPO法人「ゆうらいふ」の開設 総合的ケアマネジメントの実践

「役場のなかでできることに限界を感じた」という山田氏は、1995年に野洲町役場を退職、社会福祉士事務所「ゆうらいふ」を設立する。当初は独立して食べていけるかどうか不安もあったと語るが、それは杞憂に終わる。

「ずっと保健予防の仕事をやっていたこともあって、開設当初からいろいろなところから仕事が舞い込んできました。東京の大きな健康保険組合からも健康相談の仕事が来るなど、非常に恵まれていました」

一方で同氏は、社会福祉医療事業団の助成を受け、ケアマネジメントの実践研究を始める。1997年には竹内孝仁氏（日本医科大学教授）のコーディネートによる「英国のケアマネジメントとシステム視察研修」に参加、英国のケアマネジメントの実際について学ぶ機会を得る。

当初から山田氏は、「ゆうらいふ」が介護保険制度施行と同時に居宅介護支援事業へ参入すること、そしてほかのサービス施設などに併設するのではない独立型とすることを考えていたという。ネックになると考えていた法人化の問題も「NPO法」によりクリアすることができ、1999年同事務所はNPO法人として認証され、ほどなく居宅介護支援事業所の指定を受ける。

「社会や制度的なものが、自分が動きたい方向に変わっていったという感じです。『ほんまにラッキー』と思っていました」と、同氏は笑う。

現在、「ゆうらいふ」では居宅介護支援事業を含めた介護保険相談窓口、自立支援を主としたデイサービス、ホームヘルパー養成講座など幅広い事業活動を行っているが、その中核を成すのが「相談窓口の1本化」を目指した総合的ケアマネジメントの実践である。

相談支援事業を行っていくに当たっては、「デンマークで学んだ相談窓口の1本化と英国で学んだケアマネジメント（問題解決型サービス）の2つが理念的な支えになっている」と同氏は語る。

「ゆうらいふ」へ寄せられる相談の内容は実に多種多様である。生活上のあらゆる相談や医療機関の選択についての相談、痴呆や寝たきり高齢者の相談、介護保険に関する相談、年金や手当てに関する相談、さらには遺産相続や離婚問題とほとんど生活全般にかかわってくると言ってもよい。

「これらの相談に1つ1つ丁寧に対処し、問題解決や生活支援を図っていくことが相談員の役目であり、それを実践することによって相談員としての力量も高まっていくと感じています」

ところで、「ゆうらいふ」のケアマネジャーは全員看護師の有資格者である。

同氏はその理由を次のように語る。

「障害者と高齢者は必ずなんらかの疾患を持っています。当然、病気や体のことをわかっていないと適切なケアマネジメントを行うことができません。しかし、現実問題として医療者でない

人に医療のことを教えるのは難しいし、時間もかかります。看護師の場合その必要がありませんから、制度的なことを教えるだけですむ。だから非常に効率が良いわけです」

ケアマネジャーは利用者の生活支援を行っていくためにあらゆる制度を活用できる能力が求められると同氏は強調する。そのためには「福祉・医療・保健・生活保障制度を相談利用者のために活用する能力を持つこと」、「相談利用者の立場にきちんと立てる身分を確保すること」、「オンブスマンになれる勇気を持つこと」という3つの条件が必要であると続ける。

## ソーシャルワーカーとして 生涯現役であり続けたい

今後は地域ソーシャルワークに力を入れていきたいと山田氏は語る。その一環として痴呆ケアに取り組んでおり、現在、グループホーム建設の準備中だという。グループホームは、かつて庄屋だったという大きな屋敷の離れをグループホームとして改装した。ここを地域交流の場とし

ながら、痴呆ケアの在り方を地域全体で考えていける、地域コミュニティーの拠点にしたいというのが同氏の考えだ。

「これから地域にとって痴呆ケアというのは大きな課題の1つだと思います。だれもが痴呆になる可能性があるけれども、『ちょっとくらい物忘れしても、素敵に生活できるやんか』、『うちのおじいちゃんおばあちゃんもボケたけど、こんなに元気やで』といったことを地域の人に示していきたい。そして、同じことを在宅でもできるのだということを、痴呆性高齢者のご家族の方に理解してもらえればと思っています」

「常にソーシャルワーカーでありたい」という同氏は、「私は、生涯現役やから」と笑う。その言葉通り、所長となり理事長となった今でも自ら車を運転し、利用者のところを駆け回る毎日だ。相手の心をほぐすような屈託のない笑顔と柔らかな関西弁で、これからも地域に根差した福祉活動を実践していくのだろう。